

特集 2022 心の収穫作文

山村留学の「収穫祭」は、農作物の収穫になぞらえて、山村留学生たちが秋までの留学生活における自身の成長、興味関心、体験してきたことを発表し、今後の課題や目標を明確にする大きな節目です。今号の特集では、今年度の収穫祭で子どもたちが書いた「心の収穫作文」から、いくつかを抜粋してお届けします。山村留学がもたらすさまざまな「収穫」をお楽しみください。

※3月の修園時に文集を作成する学園もあるため、全学園からの抜粋ではありません

心の収かく

小3男子

ぼくは、留学に来て、声が大きくなりました。たいこや朝の集いのやまびこあいさつで、H兄の声が大きく、すごいなと思う、ぼくもできるかなとちようせんしてみたら、大きな声が出せるようになりました。留学生のだれかに、おなかに力を入れて声を出すようにしてみたら、と言われて、練習したら大きな声が出るようになりました。

さいごは、植物や木、山菜の名前をおぼえたことです。春にM兄が山菜に興味を持って出かけていたのとりに行つて、調べて、留学生や地域の方にも教えていただくたりして、いろんな山菜や植物の名前を覚えることができました。また、木については、T兄が火起こしをしていて、「ここにシラカバの木があつたらな…」と言っていて、「シラカバの木って何？」と聞くとき、「ちやつ火ぎいになるぐらい燃える木の皮だよ」と教えてくれました。こ人体験んで、火起こしをしている

ときに、「なんで木つてこんなに燃えるんだろう……？」
と言うと、A兄が「ヒノキはつきにくいけど、燃えるよ」と教えてくれました。じつさいにヒノキをわつて使つてみました。このように教えてもらつたり、使つてみたりして、木のしゅるいをおぼえていきました。
ぼくはしゅうえんに向けて、今よりもつとレベルアップしたいです。また、人をうたがうくせがあるので、すなおに人の話を聞ける人になりたいです。

半年で成長したこと

小6女子

私がこの半年でできるようになったことは三つあります。

一つ目は、野菜がたくさん食べられるようになったことです。前は全然食べられなかつたけど、無理やり食べていたら、「なんかおいしいかも？」と思えて、今は前の二倍の野菜が食べられるようになりました。
二つ目は、虫がさわられるようになったことです。最初は、センターで虫を見つけると「キヤーキヤー」

言つていたけど、今は「あ、虫がいるな。いやだな」ぐらいにしか思わなくなりました。そして、バツタがつかまえられるようになりました。最初は軍手じゃなければさわれなかつたけど、今は素手で四ひきもつかまえられるようになりました。さわられるようになってきたきっかけは、「Y姉、虫さわられるのかっこいいなあ、山留して虫さわられるようになったらかっこいいんじゃない？」と思い、虫をよく見てみたら「そんなに気持ち悪くないじゃん！ ちょっとさわってみよう」と思つたからです。まだ気持ち悪いと思う虫はいるけれど、前よりはたくさん虫をさわられるようになりました。もうすぐ冬になるけれど、もつとさわられる虫を増やしたいです。

三つ目は集合時間に最初よりおくれなくなつたことです。山村留学に来て、みんなが同じ時間に集まるのが大切だということに気が付きました。最初は朝のつどいにおくればつかりいたけれど、同じ部屋の人と競争したり、準備の順番を変えたりしてみました。あと、いつも集合時間に間に合つている人を目標に行動してみたりしていたら、だいたい間に合うようになり

ました。

でも最近おくれることが多くなってきたので、もう一度仲間と競争したり、早い人よりも先に行く努力をしたり、宿題などやることを早く終わらせるなど工夫して、余ゆうを持てるようにしたいです。そして早く行動してできた時間で、太鼓の練習をもつとできるよりに時間を作つていきたいです。

「やだ」

小4女子

「やだ」それが私の口グセだった。私は、やりたくないこと、めんどくさいことには「やだ」と言つてしまつていた。中学生から言われたこともたまに「やだ」と言つて否定していた。相手がどう思っているのかしらずに二学期へうつり変わった。いつもやりたくないことをさげていた。自分からにげていた。そんな私だった。あの話、あの言葉を聞くまでは……。

「自分からにげると大きな目ひょうもめぎせないし、自分の信用もうしなわれる。」

農家の母さんが陸上大会の後に言つてくれた言葉だ。

この言葉で私の頭の中で何か動いたような気がした。自分からにげていたら何にも成長しない。このままではいつまでも前の自分と変わらないと思つた。

「やだ」つて言われて相手がどんな気持ちになるかなんて考えたこともなかった。「やだ」つて言つたつて何にも変わらない。ただ人を傷つけるだけだと思つた。自分が成長できていないつて考えると、恥ずかしかつた。「やだ」と言う自分が嫌いになつた。

もうマイナスな言葉は言わない。やりたくないこと、めんどくさいこともやることに意味がある。これから残りの山留生活、「やだ」と言わず、やりたくないこともがんばつて、成長していきたい。

心の収穫

小5女子

私は今年、3年目になって1番できるようになつたことは、相手の気持ちを考えられるようになったことです。最初は、年下がいなかつたので、年上に質問を

し、気持ちを考えずに言いたいことを言っていくだけでした。でも、2年目になり、新入園生が入って来たときは、教えるのが大変でした。うまく自分の気持ち伝えることができなくて、おこつてしまつたり、おしえてもうまくできない新入園生に、「なんでできないの」と思つたりすることがありました。3年目の最初もそうじゃ準備などができない新入園生にイライラしてしまいました。

しかし、センターのルールがあるように、その子のお家にはちがつたルールがあり、最初はやり方の違いにとまどい、慣れないのは当たり前だということに気が付きました。そのことに気が付いた今では、イライラして強い口調で注意をしてしまったときのことを後悔しています。それからは、演目練習でもおちついて、おしえることができました。もう「なんでできないの」という気持ちはなくなりました。のこりの3か月も、年下や新入園生がこまっているときは、おこらず、おちついて、おしえてあげたいです。

一年と半年をおえての収かく

小5男子

ぼくは、一年目のとき、機械と料理のことしか興味を持っていませんでした。しかし、今は村のおもしろさと大切さが分かってきました。

おもしろさについて言うとしたら、米の育て方やこだわり方がいろいろあるということです。無農薬無肥料で米を育てるやり方もあれば、カモを利用したアイガモ農法で育てるやり方もあり、お米の育て方一つでも様々でした。いろいろなやり方があること、地産地消に取り組む村がすごいと思います。

次に、僕にとつて村が大切な理由は、人の温かさを感じるからです。山村留学のことを良く迎えてくれていたり、在校生が山留の大変な作業にボランティアで手伝いに来てくれたり、いろいろお世話になっているのでそのように感じています。そして、この村は学びと自然が多いため大人になっても来なくなるような存在です。だから、僕にとつてここは大切な場所です。

ぼくは、村の方への感謝の気持ちを収かく祭で恩返

しをしたいです。また、これからの村のためにも、役に立つことをしたいです。そして、もつと村のいろんな人と仲を深めていけたらよいと思うし、村のよいところをいっぱい見つけていきたいです。

成長と課題

中1男子

僕は、この7カ月で成長したと感じていることが三つあります。

一つ目は、自分から色々なことに挑戦した方が自分のためになるということに気づいたことです。今まで是人にまかせて自分は何もしない方が楽だし、考えなくて良いから楽だと思っていました。けれど、自分から挑むと小さな学びや成長がありました。けれど、自分だけでできるようになることが増えました。良いことに気づいたので、これからはもつと色々なことに挑戦するようにしたいと思います。これは、目に見えないけれど大きな成長だと思っています。

二つ目は、自然のことについて、知識を深められた

ことです。僕は、山村留学に来る前から、生き物や自然が大好きで、それが来た理由の一つでもありました。地元よりも自然が豊かな場所で暮らしてみると、動物を実際に見たり、朝のつどいで自然についての話を聞いたり、溪流釣りや歩く活動・農作業などを通してりして、自然についての知識を深めることができました。冬になったら、植物や虫などは減るけれど、雪が降れば動物たちの足跡が残るので、そこからも知識を身に付けたいです。

三つ目は、色々なことにやる気を持つて取り組めるようになったことです。小学校の頃はやりたいたいことだけ全力でやって、やりたくないことは適当に済ませていました。中学生になってもしぼらくはそうでした。けれど、色々な活動をするうちに集中してしつかりとやらなければ時間も無だになるし、自分にとつて何も良いことが無いということに気づき始め、今では何事も集中してしつかりやるように心がけています。

成長したことも沢山ありましたが、これからの課題も沢山あります。まだ一年が終わった訳ではなく、これから成長が沢山あると思うし、新たな課題も出て

くると思うので、残りの五か月も自分の変化を感じながらがんばりたいです。

自分と相手をつなぐ、心

中1男子

僕は、これまで相手にどうやって話せばいいかわかりませんでした。けれどそれを教えてくれたのは、農家の母さんだと僕は思いました。

母さんと話すときにもあまりいい話題が出せなくて、いつもちよつとしか話せませんでした。けどある時「この人あなたに似てない？」という言葉で会話が続き母さんの笑顔が見れました。このとき僕は、一つ母さんと心をつなぐことができた気がしました。

相手と話が続かないのは、自分が考えすぎているのかもしれないと思いました。たった少しのことでも母さんは笑ってくれるけど笑ってくれないときもあります。なのでそれは相手が嫌がることだったのかもしれない、だから次からは相手が笑顔になる言葉を言おうと思いました。なのでそれはそれで僕はまた心をつな

ぐ一つのきっかけとなってくれるのかなと思いました。なので僕の収穫は、相手と自分のたった一本の糸のつながり、それをつないでたもてる力だと思えます。

苦手なもの

中2女子

私は年下が苦手だった。継続三年目になってから、農家の長女になったり年下の数が増えたりして、その事に気がついた。私は年下への接し方が分からなかった。なんと言えば分かってくれるのか、どうしたら傷つかないか。注意する時や説明する時も、気を使わなければならぬ。年下と関わるのがとにかく面倒だった。こんなに気を使っているのににも考えていない、理解していないように思えて嫌だった。

2学期に入り、朝、ある小学生が一人で机を運んでいるのを見て、私は周りに声をかければいいのと思いい、そう伝えた。すると「皆忙しそうだし、自分が今なんとかできそうだから。」と言われた。私はすごく驚いた。面倒だから声をかけていないのかと思っていた。

そしてその時、自分ばかり気を使っているのではない
と思った。私は年下と接することを避けて、気など使っ
ていなかった。逃げていたから、努力している小学生
のことも見ていなかった。そして見ていなかったから
小学生の考えも知らなかった。大切なのは、お互いの
努力に気づいて理解し合うことだと感じた。逃げない
で、向き合うことが大切だった。年下が苦手だと感じ
ていたのは自分が年下を知らなかったからだだった。

私はこのことから、認め合う事の難しさを改めて感
じた。だが、その難しさから逃げずに向き合うことで、
分かり合えたり、笑い合えたりできる。今はお互いを
認め合い、そして私を慕ってくれる年下が好きだ。修
園まで、逃げずに真つすぐ向き合うことを大切にしま
ながら、お互いが気を使わなくても笑い合えるよう過ご
していきたい。

山村留学を通して学んだこと

中1女子

私は、山村留学に来て約半年間でたくさんのことを、

センターと一緒に生活している山村留学生や指導員、
色々な人達から学びました。

一つ目は、食事のマナーです。私は、東京にいた頃
は食事のマナーが悪く、しかも、そのことを友達に指
摘されないと気がつかなかったのです。指摘されて、
シヨックを受け図書室ではしの持ち方や食事のマナー
が書かれている本を見ながら、日々の食事のし方を見
直しました。でも改善できず、そのまま山村留学に來
てしまい、一番にはしの持ち方を指導員に指摘されて、
直そうと精一杯努力しました。指導員や同じ山村留学
生にはしの持ち方や、おかずのつかみ方や切り方など
はしを上手に使えるようにするための方法をいくつも
教えてもらいました。色々と苦戦しましたが、今では
正しいはしの持ち方が出来るようになりました。また、
音をたてて汁物を飲むと周りの人が不快に感じるとい
うことを知りました。そして、周りの人達が嫌な思い
をしないように飲もうと努力し、食事のマナーは山村
留学に来る前と比べるとものすごく良い方向へと変わ
りました。食事のマナーが守れるようになると、夏休
みに地元の友達に「食べ方が綺麗になったね。」と言

われて、私は「山村留学に行つて食事のマナーを改善出来て良かった。」と思ひました。

はしの持ち方以外にも改善すべき所があります。美味しくなさそうな表情で食事をしているということですね。この前指導員に言われて、初めて知りました。これまで食事中にあまり表情を意識してこなかったもので、言われた時にとてもおどろきました。たぶん、食事に食べることに集中せず授業の分からない所や個人体験が進んでいないことなどを考えてぼんやりしていたのだと思ひます。また、嫌なことがあつた日などは、感情が表情に出てしまひます。これからは表情も意識して食べられるようにしたいです。

もう一つは、色々な人達との関わり方です。私は、東京にいた頃は同年代の子としか一緒に遊んだり楽しく話したりしたことがありませんでした。だから、山村留学に来た理由の大部分は、色々な人達と関わりたかつたからです。そして、「どんな人が山村留学生に居ても絶対仲良くしよう。」と思つて、山村留学に来ました。しかし、実際は人間関係がとても難しいものだということが分かりました。だから、私は時々、たく

さんの人と仲が良い地元の友達、人の話をよく聞くという所をまねして人間関係をもつと良くしようと思ひました。しかし、簡単にはいきません。

他にも、山村留学に来て学んだことはたくさんあります。しかし、まだまだ改善することもたくさんあるので、直せるよう修園まで精一杯努力します。

ひとつのチームは磨かれる

中2男子

センターと農家さんの家での生活や活動が始まつて、今年で3年目。僕は生活している環境と一緒に過ごしている人への気持ちが変わりました。

まず、今年は小学4年生から中学3年生までの幅広い学年が共に生活しています。そこで友達との「いい関係の築き方」について教わるものがありました。

年上の学園生、年下の学園生、よくしゃべる人とあまりしゃべらない人。日常的に多くの人とここまですぐに過ごすのはここに来てからの初めての経験でした。自分はどんな言葉をかけたらいいか、ひとつのチーム

として自分は何をするか、といろいろ考え試行錯誤しながら少しずつ関係を築きあげていく毎日でした。他にも受け入れ農家の方や地域の方、周りの大人の人と関わることを通して自分が得意ではなかった、『人と聞いたり話したりするコミュニケーションの力』が少しずつ身についていると思います。

初めて出会い、まさかここまでの仲良くなつてこんな想いでいられるのがなんだか不思議に思います。話す内容に迷い、相手の気持ちが続めなくても一生懸命に話した会話はとても温かいものが生まれます。

山村留学では活動・太鼓の練習・学校……すべてのことを通して自分として輝けるような力がさらに磨かれていくような気がします。

人から学ぶ

中1女子

小三の頃に一回目の山村留学をした。そのころは、活動でいっぱいいっぱい、やったことのない体験はたくさんできたけど、あまり人から学ばなかった。自

分自身もあまり変わらなかったと思う。だからこそ今回は、自分を変え自信をつけたいと思つて、二回目の山村留学に挑んだ。

山村留学が始まつて半年。自分の中で気づいたことは、人から学ぶ大切さだ。その中でも二つある。

一つ目は、年下がいて学んだことだ。私は、家でも小三の頃山留していた頃も末っ子だった。年下がいることは初めてのことだった。年下がいると、少しでもお手本になろうと配膳時間にしつかり間に合おうとしたり、活動も積極的に取り組もうとしたり、いろいろな行動をする。そういうことは、年下がいたからこそ芽生えた気持ちだと思う。

二つ目は、人がたくさんいるこの生活では、笑顔が大切だということ。一学期は特に部活や勉強などで苦しみ、「嫌だ」「しんどい」など言葉や表情に出していた。少しまわりを見てみると、センターにはいろんな人がいて、その中には笑顔が多い人もいた。笑顔が多い人を見ると、楽しい気分になれる。当然しょんぼりしているより良い印象だ。そこで自分を振り返つてみた。あまり印象が良くないと思つた。笑顔を増やした。

方が良いんじゃないかと、じわりじわり感じるようになった。しだいにその思いが強まっていった、今半年間でなるべくマイナス発言などを減らすように努力した。少しだけできたけど、気持ちしが沈んでいる時は、やっぱり笑顔を忘れていた。それは今後の課題だと思ふ。

山留は、いろんな活動があつて、いろんな場面もあつて、人から学ぶには一番良いところだと思ふ。だから私は、人からもつとたくさん学べるよう、人と話す場面を大事にし、しっかりと人を見て、良いところをどんどん真似し、自分に自信を持てるようになりたい。

心の実の成長

中2女子

この半年間は、様々なものに出会い、心の世界が豊かになっていった。心の実が成長していく季節だった。

春。山村留学生や地元生に出会う。話して、その個性の強さに驚く。また、地域散策、ホームステイなどを通して、地域の人々や文化に出会う。何もかもが新鮮で面白い。今までとは違う、自分を知らない人ばかり

りで周りの人が個性的だという環境。自分を少しでも主張しないと、消えてしまうと錯覚する。その環境で凍った海のような心の世界に、自分を知ってもらたため、思いを伝えてみようとする気持ちが芽生えた。

夏。農作業や川遊びから、自然が心強い仲間になる。生活にも慣れ、周りとも打ちとけ、多くの仲間ができる。初めてのものを警戒し凍っていた感情の波が動き出す。波にゆられた芽は、伝えたいことが広がり、すくすくと成長していった。

秋。個人体験日が増え、自分のやりたいことを色々と探し始める。日々の生活で、人の思いや考えを聞いて、発見すること、見方が変わることがあると気づく。人に楽しんでもらえたり、役に立つたりできるはずだと考え、自分の思いを人に伝えることがやりたいことだと認める。思い切つて、たくさん思いを伝えるようになる。認められ、目に映る花が咲いた。人にたくさん思いを伝え、自分の思いをさらに深く知る。こうして、思いを伝える楽しさがつまった実が収穫できた。これから、さらに心を伝え、まずは挨拶から、言葉一つ一つを大切にしていきたい。

特集を受けて――

心の収獲作文集ができるまで

松浦 実穂（現・山村留学指導員）

心の収獲作文を纏めた作文集は、収獲祭前後（あるいは修園時）に、各学園で保護者や受け入れ家庭、先生方にお渡ししている。ここでは、学園で文集ができるまでの過程を私なりに書いてみたい。子どもたちの作文を書く姿や、作文という形で言語化を試みることの意味合いが、より伝わったら嬉しいなと思う。

収獲祭前後、心の収獲作文を書く時には、学園の主任指導員から子どもたちへ話がある。これから何を言語化するのか、自分の体験や心をどんな風に顧みたら良いのか、心の収獲とは何なのだろう。年ごと、人ごとに伝え方は変わるが、ひとつ、大切な作業をするのだと子どもたちの表情が引き締まっていく。そして書く時間。いつに

なくしんとして、何かを思い返すように、筆が走り出すと前のめりになって、一人ひとりがそれぞれの時間をかけて文を紡ぐ。

作文を読むのは、私にとつて、文字通りわくわくドキドキする瞬間だ。自然体験、生活体験を一緒に過ごしてきていても、子どもたちの印象に残っていること、感じたことや考えていること、そして表現方法は大きく違う。日頃つぶやいている気づきのまとめ、できるようにしたことや好きになったもの、自然の恵みや厳しさ、人からもらった言葉の大きさ、人間関係での悩みや葛藤……。作文用紙に連なる文字を目で追いながら、私の想像を超えた子どもたちの学びを知り、一つひとつの体験や会話が子どもたちに鮮やかな印象を残していることを知る。うまく言語化できないという叫びそのものが伝わってくる作文もある。共通しているのは、日頃見ている子どもたちの姿と作文が脳裏で合わさって伝わってくるのだ。私が捉えているその子の姿や現在地が、また少し更新される。そして、作文を手元に、担当の子どもも本人と対話しながら、一緒に推敲すいこうしていく時間。気が付くと何十分も話し込んでいることもあり、私にとつてもエネルギーを使う

時間だ。私は、その子の現在地や志が、ありのまま伝える作文になったら嬉しいと思う。そのために意識していることは二つある。

一つは、山村留学での体験を「足」とする、その子なりの思考が表れるような作文になればということ。青木会長の著書の中に、山村の子どもは体験を「足」として思考し、それは、堅実な事実認識として学習の土台になるという考え方があがる。実際、見たものや触れたもの、やってみてできたことやできなかったこと、その体験に基づいた学びには、自然や暮らしに対するちよつとした発見であれ、自己理解の深まりであれ、その子らしい個性と頼もしさがある。「虫をよく見てみたら『そんなに気持ち悪くないじゃん！ちよつとさわってみよう』と思った」であつたり、「年下が苦手だと感じていたのは自分が年下を知らなかったからだつた」であつたり、それぞれどの学びとそこから生まれていく志は、思考の過程を知るほどに力強い。

もう一つは、言い回しが「わかりやすい」「明確なもの」ではなくても、全部が具体的になくても、新しい人には伝わりうる本人たちの姿や考え、言葉の表現がある

ということだ。「笑顔を増やした方がいいんじゃないかと、じわりじわり感じるようになった」と書いた子の、一進一退の「じわりじわり」具合、時間のかかった気づきの様子。「思い切つて、たくさん思いを伝えるようになる。認められ、目に映る花が咲いた」と書いた子の抽象的な表現。これらはきつと、言動や表情の変化を知る周りの人には、心の変化を示す素直な表現として、むしろ納得をもつて受け入れられるだろう。

心の収穫作文は第一に子どもたち自身のもので、それまでの山村留学を顧みて言語化する機会が、彼らの道標の一つになればと願う。しかし山村留学は、想いを寄せるたくさんの方がいて成り立っているものでもある。作文を読む保護者へ、家族同然に過ごしてください。受け入れ家庭へ、多くの時間を共有してください。学校の先生へ、子どもたちの現在地と志が、彼ら自身の言葉を通して届きますように。傍らで彼らの山村留学を共にしているからこそ、日々体験の中で多様な表情を見せてもらっている立場だからこそ、学園の文集を纏めながら、願うことである。